

古文

古文 古人の生き方 「物語」

平家物語

木曾の最期 【全三回②】



講師 山本章博

学習のねらい

木曾の最期 ②
『平家物語』「木曾の最期」の二回目です。前は、木曾義仲と今井四郎兼平とたった二騎になってしまい、義仲は兼平に促されて、自害をするために粟津の松原に向かった、というところまでを読みました。今回は、その義仲と別れた後の、今井四郎兼平の戦いの場面になります。迫力ある描写を読み味わいましょう。

● 学習のポイント ●

- 〈一〉今井四郎兼平の武具・馬具について知る
- 〈二〉今井四郎兼平の最後の闘いの状況を理解する
- 〈三〉今井四郎兼平の心情を考える

■ 今井四郎兼平の武具・馬具について知る

『平家物語』には、武士が身に付ける武具、馬に付ける馬具が多く出て来ますので、整理しておきましょう。

- 武具 鎧／甲／弓・矢／太刀
- 馬具 轡／手綱／鐙

■ 今井四郎兼平の最後の闘いの状況を理解する

兼平の戦いの場面が詳細に描かれているので、その経過について理解しましょう。

◎ 義仲と兼平の関係

中原兼遠（義仲のめのと） ↓ 信濃の国の木曾で義仲を育てた



兼遠の子ども（義仲のめの子） || 樋口次郎兼光・今井四郎兼平・巴

◎ 兼平の戦いの経過

（兼平）名乗り「日ごろは音にも聞きつらん……兼平討つて見参に入れよ。」



八本の矢を射る ↓ 敵八騎を射落とす。

← 太刀で切って回り、敵を大勢斬り倒す。

← 〈敵〉 兼平に正面から向かえない。

← 兼平を囲って、矢を雨のように射る。

← 〈兼平〉 よい鎧を着ていたため、隙間を射られることもなく、負傷しなかった。

【重要語句】

- さんざんに……あちらこちらに。
- やにはに……一気に、ただちに、たちどころに。
- あまた……たくさん。

■ 今井四郎兼平の心情を考える

兼平はどのような思いで戦っていたのでしょうか。兼平のこの時の最大の願いは、何であったのでしょうか。それは、義仲の名誉を守ること、つまり、義仲が敵に討ち取られずに、自害を遂げることです。

兼平は、勝てないことは分かっていますが、何とか義仲が自害するまでは敵を押し返さないと、孤軍奮闘したのです。



古文

平家物語

講師
山本章博

木曾の最期 その② ●兼平の最後の戦い

今井四郎ただ一騎、五十騎ばかりが中へ駆け入り、鎧ふんばり立ち上がり、大音声あげて名のりけるは、

「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。木曾殿の御めの子、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも知らし召されたるらんぞ。兼平討つて見参に入れよ。」

とて、射残したる八筋の矢を、さしつめ引きつめ、さんざんに射る。死生は知らず、やにはに、敵八騎射落とす。その後打ち物抜いて、あれに馳せ合ひこれに馳せ合ひ、切つて回るに、面を合はする者ぞなき。分捕りあまだしたりけり。ただ、

「射取れや。」

とて、中に取り込め、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。

現代語訳

今井四郎はただ一騎で、五十騎ほどの中へ突進し、鎧を踏んばって立ち上がり、大音声をあげて名乗ったことには、

「いつもは（うわさ）で聞いていただろう、今は目でも見なされ。（自分は）木曾殿の御めの子、今井四郎兼平、生年三十三になり申す。そのような（兼平という）いたした）者がいるとは鎌倉殿（源頼朝）までもご存じでいらつしやるだろうよ。兼平を討ち取って（頼朝に）ご覧に入れよ。」

と言って、射残してあつた八本の矢を、（弓に）つがえては引き、あちりこちりに射る。（矢で射られた者が）死んだか、まだ生きているかは分からないが、あちこち敵を八騎射落とす。その後は太刀を抜いて、あちらに馬を走らせて戦ひ、こちりに馬を走らせて戦ひ、切つて回るが、面と向かつて相手になる者はいない。敵をたくさん殺傷した。（敵は）ただ、

「射殺せよ。」

と言って、（兼平を）中に取り囲んで、雨が降るように（矢を）射たが、鎧がよいので裏まで通らず、鎧や甲の隙間を射ないから（兼平は）傷も受けない。